

有権者になるということ

都城泉ヶ丘高写学校一年 宮本 和夏

今の私は有権者ではありません。そんな私がなぜ今ここに立っているのか。そのまっぴらとび、た出来事を話そうと思います。

私は中学二年生のころ生徒会選挙に出ました。立会演説会の2ヶ月近く前から推薦人と一緒に放課後残りの練習したり、どうすれば伝えたいことが伝わるか話し合ったりして頑張りました。そしておかえたりモット演説

説会当日。感染症防止のためリモートで行われた演説会でした。それまで一番の演説をするこゝろがでましました。

しかし次の日友達から「機材トラブルで一部のクラスの生徒は私の演説が聞こえなかった」ということを教えてもらいました。その時の衝撃は今でも忘れられません。「悔しい」「あんなに頑張ったのに」色々な思いが頭に浮かびました。一人のために選挙をやり直すなんて現実的に考えてありえない

という思いが強か。たのを覚えていきます。  
その翌日、友達に勧められ、担当の先生に  
相談してみることになりました。

そして先生に全てを話すと、「大丈夫、あと  
は任せて」と言ってくれ、結果的にもう一度  
演説会が行われることになりました。先生が  
「このことを聞いたとき、本当に先生が頼も  
しく、もうかうして見えました。小じな中  
学校という社会の小じな選挙にも「公平さ  
っ公正さ」を軽んじない、そんな大人に「そ

んび有権者になりたい」とその時強く思いまし  
た。そしてそれと同時に、もし機材トラブル  
を教えてくれた友達、相談を勧めてくれた友  
達、そして行動してくれた先生、そのように  
人たちがいなか。たらどうな。それたんどう  
う、と少しこわくなりました。私自身もそう  
だ。たように自分の無力さを感じ、あまらめ  
ようとする状況から脱するためには周りの助  
けが必要不可欠だと強く感じました。ちなみ  
に選挙の結果は会長ではなく役員当選でした。

ただ、結果以上に後悔する事なく選挙をやりました、ということですが今の私の支えにたいはと今では感じています。そしてこの一年後今度は生徒会役員として支える側を再び選挙でおかえました。同じことか起らないよう役員をXのバト、先生方と対策を徹底し、選挙は無事成功しました。

これらの一連の経験から私が伝えたいことはそれは「公平さ」「公正さ」を重んじる行動は誰かに希望を与えてくれるということだと思います。

最初に言った通り、私はまだ有権者にはありません。実際の選挙を経験したこともありません。それでも選挙の持つ「公平」「公正」に救われた一人です。無力さを感じていても自分一人が行動しても何も変えられないと思っても、いっても、さらに言えば、どんなに貧しくても、どんなに勉強が苦手で、どんなに足が遅くてもそんなもの選挙にはほに一つ関係ありません。選挙は必ず「公平であり公正」です。そして有権者はどこまで平等です。

そんな有権者には文字通り権利があります。  
 投票する権利はもちろんだ、投票をしないとい  
 う選択をする権利も存在していることを私た  
 ちは忘れてしまいかちです。もちろん投票を  
 しない選択も一つの道ではあるとは思いません。  
 ただ私はやはり社会でも言われていた通り、  
 『選挙に行こう』と言いたいです。但投票率  
 が一部の人による投票が続くと、『公平、公  
 正』である民主主義が成り立たなくはなす  
 まいます。今はまだその影響がなくても過去  
 の私のように苦しい思いをする人がおれ出  
 てくるかも知れない、私はそれは絶対に避け  
 たいです。  
 社会という集団である以上、投票する、し  
 ない、分かれるのは当然です。それでも選挙  
 は民主主義である日本の未来を決める最大の  
 機関であることには変わりはありません。そん  
 な選挙に行ける日と少なくなくと私ほわくわく  
 して待っています。